ジェンダー・フリーは
戦争と暴力を否定し
多様さを尊重する
21 世紀の生き方

教育は，何よりも，一人ひとりの個人としての違いを尊重しあい，それが，同時に平和な社会を作るのに貢献することを目的とするものです。もし，教育が一定の人間パターンだけを正しいとか望ましいものと教え，それ以外の生き方をする人に恥ずかしい思いやつらい思いをさせたりするとすれば，教育は，人権を侵害し，互いを差別しあったりすることを助長することになります。それは、平和で非暴力的な社会を作るという目的を破壊することになります。

ジェンダー・フリーは，子どもの一人ひとりが自分で生きる力を選び取り，「男らしさ」や「女らしさ」に縛られずに，互いの違いを尊重しながら共生を進めようとしてうまれたものです。男女別の名簿から始まって，学校の行事や地域の生活の中で，男と女の生き方に枠をはめ、差別を助長する傾向に対して、ジェンダー・フリーは、批判の目を向けてきました。

ところが，２００２年に千葉県が男女共同参画促進条例を制定しようとした頃から，男女共同参画社会形成や男女平等を目指す運動にたいして反対する激しい動きがみられるようになりました。そこでは１９９９年の男女共同参画社会基本法の制定以降，「２１世紀の最重要課題」と位置付けられて進められてきた男女平等やジェンダー・フリーの流れへの露骨な攻撃が続いています。

のびやかでゆたかな働き方や暮らし方こそ、ジェンダー・フリーのめざすもの

今，日本は，働き方も暮らし方も大きく変化しています。終身雇用制度は大きくゆらぎ、働き方は多様化し、長寿化社会，未婚化社会が急速に進行し、暮らし方や働き方が大きく変わりつつある時、もっとも大事なことは，特定の暮らし方や働き方だけが優遇され，これと異なる生き方をする人が差別や不利益を被ることのない社会を作り上げていくことです。

「男は仕事，女は家庭」といった性別役割分業はそれ自体で差別ですが、今ではそもそも、男性一人の給料では家族の生活を維持することが経済的にも難しくなっています。その中、男女がお互いの条件を十分に話し合い，子育てや家庭生活と仕事とが調和のある形で可能になるように，社会的にも保証していくことが必要です。そのためには，男女には特性の違いがあるという言い方で，初めから決め付けて、役割分業を押し付けるよりは，のびやかで柔軟な人間関係，夫婦関係などを工夫し合うことこそ重要です。現状の働き方や暮らし方だけが肯定されていけば，女性が仕事と家事に疲弊するばかりでなく、男性も育児休業をとりたくてもとれず，男は頑張らなければならないとか，強くなければならないといった生き方が押しつけられ、これを重圧に思うようになるのです。

ジェンダー・フリーは，家庭やプライベートな生活と仕事や社会的な活動がバランスの取れる社会づくりを目指すことによって，女性の社会での活動の可能性を広げ，男女差別をなくすことをめざします。それだけでなく，男性自身が仕事だけに縛られてきたこれまでの働き方や生き方に対しても，ゆったりとしたバランスの取れた生活を可能とします。

これからの社会で必要なのは，男も女もみんなが一緒に暮らしてよかったと思えるような多様な支えあいの形を見いだしていくことなのです。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、多様な生き方を認めず、差別を助長しようとしています。

「男らしさ」「女らしさ」をあるべきものとして押し付けようとする人々は，一人ひとりの多様性を認めません。彼らは、家族の形も，まるで「夫婦プラス子ども二人」の家族像だけが理想であるかのように押しつけます。多様化する社会にあって、人々のつながり方も多様であるにもかかわらず、これを意識的に狭めようとしているのです。

男女がよく話し合ったうえで婚姻届を出し、妻が夫の姓を名乗り、夫婦の間の子に夫の姓を使うことも当然あるでしょう。しかし、みんながそのようでなければならないのでしょうか？どのような人間関係を望ましいと考えるのかには，いろいろあるのではないでしょうか？結婚せずに生涯独身でいてもいいし、結婚しても婚姻届を出さずに生活してもいいし、夫婦が別々の姓を使ってもいいし、子どもを産まないと決めた夫婦がいてもいいのではないでしょうか？またシングルのまま子どもを産むことも、子連れ同志の再婚もあるでしょう。そして、その中には、ヨーロッパの中で急速に広がっているような男女を問わない多様な共同生活のあり方を探る試みも必要となってきているのです。

幸せの形は千差万別、一人ひとりの顔が違うように違います。まさに多様なライフスタイルがあってこそ、自分らしく生きることができるのです。ひとつの形だけが正しく、幸せの形だとし、これと異なる形を否定することになれば、そこに必ず一方に優越感、一方に劣等感が生まれます。この優越感と劣等感を生む構造こそが差別なのです。

ジェンダー・フリーを攻撃する人は，日本の伝統文化を押し付けることには熱心ですが、それも特定の時代に一時的に強調されたものだけがほとんどで，民族の共生を重視せず，日本文化の中の多様性を認めていません。

人はそれぞれ個性が違い、異なるアイデンティティを有し、これらは等しく尊重されなければなりません。しかし彼らはそんな多様な個性やアイデンティティを認めず、一定の生き方を押し付け，それに従えない人を差別したり，生きにくい思いを持つようにさせようとしているのです。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、戦争を肯定する道を進めようとしています。

彼らは，上から人の生き方に枠をはめて強制しようとしています。男性には「強くたくましく支配するもの」として「男らしさ」を，女性には「優しく素直で従順なもの」として「女らしさ」を押し付けようとしています。これは、家父長制のもとの男女観です。家父長制にあっては、男性が女性を支配し、女性は男性に従い、暴力さえ容認されてきました。そしてこれこそがまさに戦前の軍国主義を支えてきたものなのです。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、また自分で考え、行動する力を奪おうとします。自分で考え、行動する力を育てることは、民主主義の担い手を育てる教育の最も重要なことです。これは、多様な生き方・考え方が許容されている自由な社会でなければ育ちません。そして、有益な情報へのアクセスを保障し、多くの情報から有益なものを取捨選択できる力を養い、自らの意見を形成しうる力を育てるものでなければなりません。たとえば、彼らは、性についての基本的な知識を教えることを禁止しようとしています。性の教育こそは、一人ひとりがどのように他者とかかわるかを学ぶ大切で基本的なものです。これを「知らしめず」とばかりに禁止してしまえば、氾濫する性産業の金儲け主義に走った暴力的な性情報に操られるままになってしまいます。それだけでなく、もっとも基本的な私事について決定する力を身につけ学ぶチャンスを奪っているのです。これは結局、自分で考えて自分で人生を選び取ることができるような教育をめざすのではなく、上から言われるままに黙々と服従するような人格の形成をめざしていることにつながります。

このようななかでは，子どもたち自身が話し合って問題を考え，自分たちで解決する力を養うという民主主義は育ちません。

これは、日本国憲法と教育基本法を改悪し、軍隊を肯定し、戦争への道を進める流れと直接につながっています。国民一人ひとりが自分の生き方と国との関係を考える力を育てるのではなく，国策と国威に安穏と追従する国民をつくり、号令一喝、一枚岩で動く社会をつくろうとしているのです。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちの驚くべき発言

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちの中には、こうした視点がないどころか、事実を正確にとらえようとせず、勝手な思い込みや、誇張や歪曲があるだけでなく、露骨に差別を助長し、少数者を排除しようとしています。

驚くべき発言

▶「人類は（生物学的な）男女の差異に基づき、相互に補完し協調する文化を歴史的に形成してきた。伝統的家族の形態はその典型である（男は外で働き、女は家事・育児を行う共存関係）。ジェンダー平等はこの文化を正面から否定する」「武士道、（略）神話以来の文化的伝統を破壊」

【光原正（日本会議首都圏地方議員懇談会ホームページ）】

▶肉体的に違いがある男女の特性を生かすのが教育だ。混合名簿を認めれば、男女に一緒の制服を着させるなど、エスカレートする危険もある。

【「つくる会」八木秀次（03年6月28日毎日新聞）】

▶この13年をこえる異常な性器・性交教育の結果、その弊害は若年層の性病罹患率や妊娠中絶の増加という形で具体的にあらわれはじめています。

【桜井裕子（05年11月号「正論」）】

▶男女の性差は脳からきている。脳が違うのだから、その構造に応じて教育したほうが、能力を発揮できることもある。【自民党・谷田川元（03年2月千葉県議会本会議）】

▶（痴漢撲滅ポスターについて）ひと言でいえば、“男はみんな暴力的存在”というフェミニズムイデオロギーの宣伝である。

【千葉展正（06年「男女平等バカ」宝島社）】

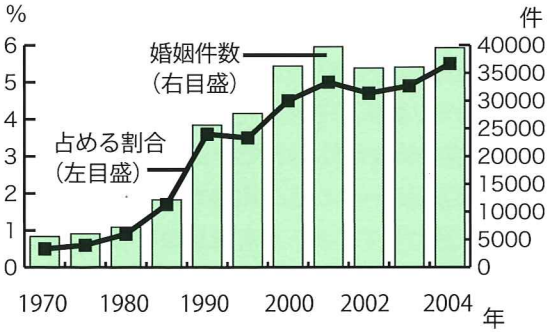
▶「新潟県白根市茨曽根小学校が男女混合だった児童の出席簿を今年4月から男女別に改めていたことが分かった。同校の長谷川清長校長（59）は『男女混合名簿などはマルクス主義フェミニズムに基づいており、思想教育につながる』」

【長谷川清長（03年6月28日毎日新聞・大阪）】

国際化のなかで多文化共生社会を

ジェンダー・フリーは、「自分らしく生きられる」ことを保障されるという人権の問題です。
日本には、さまざまな民族、国籍の人々が住んでいます。外国人登録者だけでも約 200 万人（2004 年末現在）。しかも、年々増え続け、日本の人口で占める割合は増えています（図1）。国際結婚も急激に増え、2004 年の結婚総数のうち、約 18 組に 1 組は、夫婦の一方が外国籍の結婚です（図2）。他方、海外で生活する日本人も増え続けています。こうした国際化の流れのなかで、いまや日本人だけの視点や問題意識だけでは、人々の人権は尊重されません。外国籍やマイノリティーなど、さまざまな人々の人権や多様な価値観等を尊重し、互いに共に生きるための多文化共生の社会が求められます。教育においても、多文化共生のための教育が進められる必要があります。

夫婦の一方が外国籍者の婚姻件数と
日本の婚姻総数に占める割合



ジェンダー・フリーの教育は、多文化共生社会をめざす道

荒川区の人口中、外国人登録者は 7%を占めます（2006 年 1 月 1 日現在）。住民を代表する一人として、また、多文化共生社会を実現させるためにも、在日韓国・朝鮮人が委員に加わるのは当たり前でしょう。むしろ、少数派が積極的に意見表明をすることで、そして、それを十分受け止めることで、いままで見えてこなかった問題が見えるようになるはずです。多文化共生社会を作るうえには、このことはとても大事なことです。
ジェンダー・フリーの教育は、国際化のなかで、多文化共生教育に不可欠ですし、その社会への道筋をめざすものです。

戦争と暴力と差別のない21世紀の社会を実現するために

戦争と暴力と差別のない社会の実現は人類普遍の悲願です。そのためにこそ、戦争の世紀といわれた 20 世紀の反省を踏まえ、21 世紀はこれに一歩でも近づくために、男女共同参画社会の実現が 21 世紀の最重要課題と位置づけられたのです。男女共同参画は男女の平等と共生を求めるものですが、平等と共生は暴力と抑圧とはまったく相容れないものであり、平等と共生は平和なくして実現しません。
わが国は世界に先駆け、軍隊を持たず戦争を放棄することを憲法に明記しました。そして同時に家族にあっても、婚姻における両性の平等を保障し、家父長制を明確に否定し、男性の女性に対する支配を否定しました。今ではよく知られていますが、24 条の起草者であったベアテ・シロタの原案は「婚姻は・・・男性の支配ではなく相互の協力により維持されなければならない」とされていたのです。軍隊と戦争を放棄したことと家父長制を否定したことは、わが国は、国家間においても家族内においても暴力による支配を認めないということを意味します。これはわが国が世界に誇るべきことです。しかし私たちは 60 年前にこの誇るべき内容の憲法を手にしながら、未だこれを実現することができず、時に憲法は現実と乖離してしまったかに思えることがあります。これは憲法を身近なものとして実現していく努力を怠ったからに他なりません。そして、この状況を見直し、平等と共生を身近な日常生活に実現するための教育ーこれこそがジェンダー・フリー教育の実践なのです。
ジェンダー・フリーを攻撃する人は、期せずして憲法 9 条と 24 条を改正しようとする人と一致しています。これは決して偶然ではありません。ジェンダー・フリーこそは憲法 24 条の具体的実践であり、ひいては平和主義を体現する憲法 9 条の一里塚でもあるのです。
戦争と暴力と差別のない 21 世紀社会を実現するために、日々、ジェンダー・フリー教育を実践しましょう。

ジェンダー・フリー研究委員会
大谷恭子（弁護士）・佐藤和夫（千葉大学）・石井小夜子（弁護士）
連絡先：国民教育文化総合研究所　〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 日本教育会館内
TEL：03（3230）0564　FAX：03（3222）5416　http://www.jtu-net.or.jp/soken/

家族・家庭

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、女性と母親に我慢を強いる

家族が生活していくなかには，さまざまな困難に遭遇します。家族の病気、家庭内暴力，不登校，ひきこもり，倒産や借金や離婚などの問題が人生に降りかかってきたら，何とかみんなで協力し合い，家族や知り合いあるいは地域の協力の中でさまざまな工夫によって克服していく必要があります。これらは，誰か一人が我慢すれば解決できる問題ではなく，働き方を含めて，社会と家族のあり方を改善する中で解決がされていくものです。ところが，ジェンダー・フリーを攻撃している人たちは，女性と子どもが我慢して「父母・祖父母への敬愛の念を深め」ることによって「充実した家庭生活を築くこと」ができるはずだと主張しています。
彼らは，表面では「家族や家庭」を否定的に扱うのは許せないといいながら，じつは家族や家庭が変容する中で今起きている問題については，十分な対策を示すことなく，子どもや女性たちが，我慢し、服従することだけを事実上強制しています。

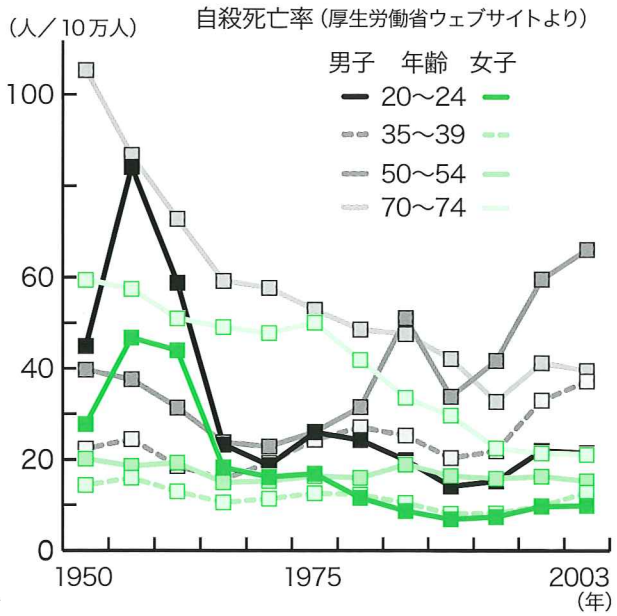
ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、家族が抱える問題を放置し、DVをなくしていくことができません

今日，世界的に DV への関心が高まっています。ＤＶとは、夫や恋人など親密な関係において，強い立場にある者が弱い立場の者へ暴力をふるうことです。その暴力は男性から女性に対するものがほとんどです。こうした「女性への暴力は、恐怖と不安を与え、女性の活動を束縛し、自信を失わせ、女性を男性に比べて更に従属的な状況に追い込む重大な社会的・構造的問題」（１９９９年・男女共同参画審議室「女性に対する暴力のない社会を目指して（答申）」であり、「男女共同参画社会の実現を阻害するもの」（同答申）なのです。

こうしたなかで，「配偶者」に限定されたものの、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（「ＤＶ防止法」）が制定されました。この法律は、ＤＶは「犯罪行為」であると明言しており，男女共同参画社会形成のために不可欠のものです。
ところが，ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、「ＤＶ防止法は確実に家族を破壊する。夫たちと子どもたちの人生を滅茶苦茶にする。妻たちも幸せかどうか分からない。あと数年もすれば、この法律の恐ろしさが世に広く理解され、男たちは結婚したくない、と考えるようになるかもしれない。少子化もますます進むことになるだろう」（『男女平等バカ』野牧雅子）など、男性の暴力を肯定するかのような発言をし、「男中心の家族制度」を何とか維持したいという意向が明確になっています。
自らの暴力を克服しようとしている男性加害者も出てきており，それへのサポートも拡大しつつあるなかで，そのような男性たちをも侮辱する発言だといえます。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、男性から豊かな家庭生活の可能性を奪い、女性が社会で輝く機会を奪おうとする

今，女性たちに結婚を躊躇させ，急速な少子化が進んでいるのは，女性だけに家事と育児に過大な負担が課せられ，夫と協力し合って，家庭生活にも仕事にもやりがいを持って暮らすことができにくい環境にあるか



らです。
家庭生活を放棄せざるを得ないような働き方では，男女や夫婦・友人関係のなかでのコミュニケーションの機会も奪われ，地域づくりに参加したりする多様な生活の可能性も奪われてしまいます。現在，年間三万人を超える自殺者があり，その大半が，四〇代以上の男性であることの大きな理由に，仕事以外の豊かな生活を奪われている現状があるのです。男も女も仕事と家庭や自由時間のバランスの取れた生活をできる社会の形成が不可欠です。そして，社会の中で、女性たちも十分に自分の能力を生かし，役割を果たすためには，男女が差別されることのない労働条件が作られなければなりません。そのためにも，子育てや家事が家庭のなかだけに閉じこめられて孤立して自分だけで背負うのではなく，地域や自治体などのバックアップを受けながら，男女が協力して子育てと家庭生活ができるような環境を作り上げる必要があります。これこそ，男女共同参画社会のめざすものです。

ジェンダー・フリーの教育

ジェンダー・フリーの教育は 一人ひとりの違いを認め合い、協力し合う

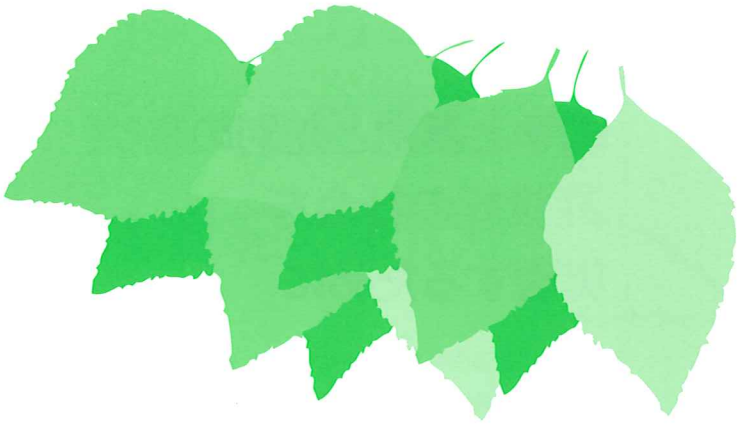
男女混合名簿は，男女を名簿上混ぜることによって、いつでも男が先で当たり前とか，クラスの学級委員は習慣で男子になっていたなどといったこれまでややもすれば見逃しがちだった問題を浮かび上がらせることができました。
それだけでなく，不必要な男女の区別が人を傷つけ生きにくくさせたり，差別につながることも明らかにして，人間を何でもまず男と女に分けることに反省を与えました。

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは、男と女を分けることによって若い人を縛ろうとする

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは，男女混合の「身体検査」や騎馬戦を強要するとか，男女のトイレまで一緒にしようとすると攻撃しています。男女には違いがあるので，混ぜれば，性道徳が乱れ，羞恥心さえも無視されるという訳でしょう。
ところが，このようなやり方こそが，性よりも個性を重視する若い世代にとってはとても束縛になることを，彼らは気がついていないのです。たとえば，これまで，多くの学校では，男子には柔道や剣道，女子はダンスといった区別をごく当たり前に指定することがありました。今の若い男性のなかには，ダンスが大好きというのはごく当たり前のことだし，女性でサッカーや野球をやってみたいと思うのも，自然なことだと受け止められています。おしゃれに熱中する男性も，仕事に熱中する女性，あるいは，甘いケーキ好きの男性がどうして排除される必要があるのでしょう。
「身体検査」やトイレを一緒にしたりするのを強要するのは，よくないに決まっています。男同士だって，一つひとつが密室性と遮音性の確保されたトイレを使えて，互いに気兼ねしなくてもいいようになるのが一番です。ジェンダー・フリーは一人ひとりの違いを大切にすることを目指していますから，男同士のトイレだって，互いの身体や性器がさらけ出されるようなことのないような環境を作るべきだと考えます。男だって他人に身体を見せるのはイヤな人も多いのです。

男女平等の伝統や習慣がいい

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは，鯉のぼりや



雛人形を大事な日本の伝統のように強調しています。子どもや健康な成長を願って祝うことはすてきなことです。しかし，男の子だけが鯉のぼりを祝って強さを願い，女の子だけが雛人形を喜んでやさしさや思いやりをもてというのが本当にいいのでしょうか。男の子が、雛人形を好きで、優しい思いやりのある魅力的な男性になり，女の子が、兜をかっこいいと思い，強い存在になりたいと思っても，それを一人ひとりの個性の違いとして認め合うな豊かな文化こそが必要です。誰もが自分の性を肯定していけるようになることは，とても大切なことです。だからこそ，お互いが相手の性を尊重し合い，お互いを支え合うような文化が大切なのです。
日本の伝統を調べると，じつにさまざまなジェンダー・フリーの文化があるのに気がつきます。たとえば，日本語には世界中でも珍しい呼称に「さん付け」があります。男も女も,「＊＊さん」と性の区別なく呼ばれて，とても心地よくひびきます。また，中世までの伝統を見ると，料理ができるのがむしろ武士の重要なたしなみだったようです。誰でも知っているように，紫式部や清少納言の時代に女性作家たちは当たり前だし，女性天皇も歴史のなかでは珍しくありません。何と言ったって，卑弥呼も女性だったのですから。
ジェンダー・フリーこそは男と女の区別なく，誰もがその可能性を伸ばしていこうとする新しい時代の伝統となるものです。

体育の共修

ジェンダー・フリーは、生涯にわたってスポーツを楽しめることをめざしています

ジェンダー・フリーを攻撃する人たちは，男女がいっしょに体育をすることが悪いことであるかのようにいい、運動会でも騎馬戦を一緒にしているのは問題だといっています。まるで，男女が一緒にスポーツを楽しむことは，性的な乱れを増大させるかのような妄想に陥っています。男女がともにスポーツをおこなうことで、身体が接触する場合があることが好ましくないという人がいます。しかし，これは、男女の触れ合いがまるですべて性的な意味しかないように思わせる考え方です。
もちろん，一人ひとりの性に対する感じ方や捉え方は違うので，個人がそうした接触をイヤだと思うのであれば、当然尊重されなければならないでしょう。しかし，男女が互いに一人ひとりの能力や個性を尊重し合いながら，協力してスポーツを楽しむことは，人間の大きな喜びの一つです。そのためには、個人差なども考慮して、みんなが楽しめるように競技方法やルールを工夫したりしながら,「楽しい体育」を男女ともにおこなっていくことが重要です。体育の男女共修を否定する意見は，こうした豊かな可能性を奪う時代錯誤の硬直した考えです。

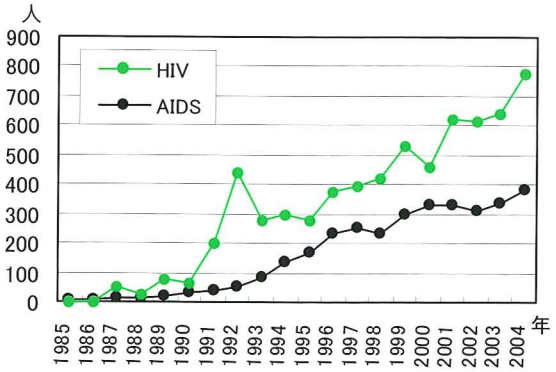
男女が分かれて体育を行うべきだとするこれまでの主張の根底には，勝ち負けだけが重要であるかのような競技スポーツ至上主義の考え方があります。一部の卓越した選手の養成やオリンピックなどでの勝利だけが重要であるかのように考えて，一人ひとりの市民が一生涯にわたってスポーツを楽しむという「生涯体育」の考えをないがしろにするものです。

性の教育

子どもたちには さまざまな性情報に 振り回されない 十分な性教育が必要です

子どもたちにはさまざまな性情報に振り回されない十分な性の教育が必要です
若い世代の中で性感染症の増加したり中絶が深刻化しています。思春期の子どもたちに性に関する知識や情報、支援が十分に提供されていないためであり、このことは国際的に問題になっています。ビデオ，雑誌，コンピューターなどの性差別と暴力を肯定する性産業の誤った情報にさらされている状況を重く受け止め、子どもたちが性に関する科学的な知識や適切な判断力を獲得する機会を保障することが重要です。
「性教育」を批判する人たちは、性器や性交を取り上げることは過激だといいます。しかし、性器はからだの一部分であり、子どもたちが自分のからだに興味や関心をもつのは当然です。生殖のしくみを知ることは、自分自身がかけがえのない存在であることを認識するために重要なことです。
現在，エイズや性感染症が増加して深刻な社会問題となっています。なかでもエイズは、先進国では感染者が減少または横ばいなのに対し、唯一日本は増加していると指摘されています。コンドームを含む正しい使い方の学習はどうしても必要なのに，「性教育」を攻撃する人たちは「授業でコンドームを扱うことは性行動をあおることになる」などといっています。
性に関する必要な知識や正しい情報を得ることは、子どもたちにとって成長に欠かせない権利なのです。

HIV 感染者および AIDS 患者報告数の年次推移



女性の性の自己決定の 権利が脅かされて 危機的状況にあります

今日なお、女性への性的虐待や性的強要が後を絶ちません。ここには，女性が性関係について自己決定できることの大切さを，十分に学ばせることをさせない現状の問題が反映されています。「性的関係を結ぶ」という選択や決定は当然個人の権利として尊重されなければなりません。また、妊娠・出産は、女性に身体的にも精神的にも大きな影響を及ぼすものであり、この点からも性の自己決定は保障されなければなりません。これらは近時，国際社会においてリプロダクティブ・ヘルス / ライツ（性と生殖に関する健康 / 権利）として認められてきたものです。望まない妊娠や性暴力によって女性の人権や健康が損なわれることなく、安心で安全な妊娠・出産が保障されることは国際社会の一員としても大切にされなければならないのです。

ジェンダー・フリーは 一人ひとりの性を尊重します

日本は、児童ポルノの最大の輸入国となっており、年間 2,000 件を超える強姦事件が発生しています。女性や子どもを性的対象とみなす一方的性行動や性意識は、一人ひとりの存在を尊重できないところから生まれます。個人を尊重し、一人ひとりの尊厳を重視するジェンダー・フリーの教育こそは，そのためにもっとも重要なものです。性の教育についても、子ども、教職員、保護者が気軽に話し合える場や機会、環境が設けられることが必要です。子どもたちが主体者として、自己決定していくための重要な一つであると捉え実践にとりくんでいくことが重要です。